

派遣者番号	30K19	氏名	田上 ありさ
研究主題 —副主題—	小学校国語科におけるUDLを取り入れた読みを深める学習アプローチ		
派遣先	早稲田大学教職大学院	担当教官	高橋 あつ子
所属校	品川区立台場小学校	校長	中村 太郎

キーワード：学びのユニバーサルデザイン（UDL）、小学校国語科、学習環境

## 1 研究の主題設定の理由と目的

新学習指導要領では、「生きる力」を児童・生徒に育むため、「何のために学ぶのか」という観点が必要視され、育成を目指す資質・能力の三つの柱で再整理された。そして、改訂の基本方針の一つとして、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進を挙げている。その中では、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していく必要があると述べている。

現在、通常の学級では、障害のある児童・生徒と障害のない児童・生徒が同じ場で共に学ぶことを目指している。しかし、2012年文部科学省の調査から、通常の学級の中で教育的支援を必要としている児童・生徒が増えているのにもかかわらず、支援が受けられていない実態が明らかになった。

こうした背景から、一次支援サービスの段階で通常の学級での多様な児童・生徒の学びを保障する授業改善の必要であり、これまでの「みんなが分かる授業」から「個の学びに合わせた学習環境」づくりへのシフトチェンジが必要であると考えた。

その際、個によってつまずきは多様であり、主体的に学ぶ学習者を育むためには、「個の学びに合わせた学習環境」、つまり多様な学習者に対応する柔軟的なカリキュラムが必須である。そこで、アメリカのCASTが提唱する「学びのユニバーサルデザイン」(Universal Design for Learning:以下、UDL)に着目した。

本研究では、学習のバリアとなるものを予測し、児童が自ら選ぶことができるオプションを用意することやルーブリックを活用することで、児童・生徒の主体的な活動につながる。また、このような学習のプロセスを重ねることで、「読みを深め合う」ことにも効果が見られることを明らかにする。

## 2 UDLについて

米国のCASTが提唱しているUDLは、全ての児童・生徒のニーズを満たすべく、学ぶための選択肢を多様にすることによって、教室における学びを誰にとっても達成可能となるような柔軟性のある学習環境調整するための理論的枠組みである。

一つの方法のみを全ての学習者に対応させようとするようなカリキュラムではなく、多様な学習者に対応する柔軟的なカリキュラムをつくるためのガイドラインであり、脳科学のエビデンスを基に、学習科学に基づいた三原則をめぐって構造化された学習指導のフレームワークである。

教師が与える授業ではなく、学習者が多様な選択肢から自分に合った学習方法を選んで学習していく「学ぶ環境に焦点をあてたもの」である。

UDLの目的は、「目的をもち、やる気がある」「いろいろな学習方法や知識を活用できる」「方略的で、目的に向けて学べる」『学びのエキスパート (expert learner)』である。これは、文部科学省が求める力と同義であると言える。

## 3 研究の内容・研究の方法

対象 公立小学校4学年U組(27名) 私自身の授業

時期 平成30年10月～11月のうち15日間

使用教材 「ごんぎつね」新見南吉(光村図書)

分析方法 児童の学習感想・交流中の会話分析・授業後アンケート調査

毎回の授業ごとに児童の反応や様子を振り返りながら、児童に必要なものを付け加えたり、即していないものを変更したり、授業改善をしながら行っていた。

多様なつまずきを乗り越えるための手だてとして、①読むためのオプション、②自分の考えを表現するためのオプション、③ルーブリックの作成・活用、④読みを深める場のオプションの4点

それぞれに複数のオプションを用意した。

これらのオプションは、児童が自身の学習に合わせて自分で選択していくものである。ここでは、オプションの中の2つに焦点を当て検討していく。

#### 読むためのオプション

児童にとって、「ごんぎつね」は初めての長文教材である。読むことへの抵抗感などによる多様なつまづきを考え、各自が使用できるタブレットPCに音声データ(以下、音声コンテンツ)を収録し、文字で読むか、聞くかを選択できるようにした。

- a. テキストを基に自分で音読する
- b. テキストを基に自分で黙読する
- c. 音声コンテンツを活用して聞いて読む
- d. 先生や友達に読んでもらい、それを聞いて読む
- e. 音声コンテンツを活用し、テキストと合わせて読む

児童は、上記の五つのオプションから、そのときの自分の学習に合ったものを自分で選択して学習を進めていく。

#### 読みを深める場のオプション

文学教材への読みは、読者によって異なる読みを交流することで、自分の読みを見直し深まっていく。交流の際、話すことに苦手意識がある児童も主体的に活動できる学習環境として、教室空間の見直しを行った。本研究では、「個で考える場」と他者と対話できる「交流スペース」をオプションとして提供し、移行のタイミングも自由に選択できるようにした。また、個々の対話を検討するため、教室内に8個のICレコーダーを用意し、児童の話し合いを録音できるようにした。

## 4 研究の結果と考察

学習を重ねるにつれ、オプション選択に変化が見られた。読みにおけるオプションでは、読みの得意・不得意にかかわらず、自分が必要なときに音声コンテンツを活用する様子が見られた。また、音声コンテンツを活用することにより「読む」ことそのものに必要な認知的負荷が軽減され、思考にリソースが振り分けられる。

このような個々の読みを保障することで自分の考えをしっかりとつことができ、途中で投げ出す児童は全く見られなかった。

読みを深める場のオプションを設定することで

「自分一人で考えを形成する過程」においては、「個で考える場」を選択し、「形成した自分の考えを他の児童と交流し、さらに自分の考えを深める過程」においては「交流スペース」を活用するなど、自己の学習をメタ認知し、自己調整しながら学習する姿が見られた。自分の力を発揮できる場選びから主体的な交流につながったと考える。

交流の具体を記述するため、交流場面における児童の会話をトランスクリプトし検討した。

その結果、対話をする中で安心感が生まれ、自分の考えを積極的に発表する様子や、他者の意見を聞くことで自分の読みを再確認する様子が伺えた。さらに、グループ対話の中から新たな疑問が生まれ、次の読みを深めるクラスの問いとなった。教師が与える問いではなく、交流の中で新たな問いが生まれ、その問いを解決していく、まさに「学習者主体の授業」であると言える。

児童の感想を分析した結果、「学びやすさ・意欲」「学びの高まり」の要素を含んだ記述が多く、自分に合ったオプションを選ぶことで児童の主体的な学びにつながったと言える。

また、交流を通して他者との学びを味わったり、読みを深め合ったりすることができ、自身の学びの高まりや自信につながっていることをメタ認知することができたと言える。

## 5 今後の展望

本研究を通して明らかになった成果は、「個の学びに合わせた学習環境」をつくることで、児童は楽しみながら主体的に学ぶことができることである。児童は、学びやすい教材や学習方法を自ら選ぶことで意欲と自信をもつことができる。自信をもつことで言語活動を通して相手に伝えることができ、読みを深め合うことにつながったと考える。今回の学びの変化が国語科の他単元や他教科でも保障されていくのか、今後もUDLの視点を取り入れた実践を行っていく中で検討していく必要がある。

また、児童が自分に合った教材や学習方法を的確に選択していくことの重要性が明らかになった。早い段階で適切な方法を選べる能力をいかに身に付けていくことができるのか今後の課題としたい。